

カンボジア、オランダで感じた「国」の姿

ワタミ株式会社 代表取締役会長・CEO

わたなべ
渡邊 美樹

昭和34年生まれ。57年明治大学商学部卒業。経理会社に半年間勤め、その後1年間運送会社で働き資本金300万円を貯める。59年創業。平成12年3月に東証一部上場を果たす。「学校法人 郁文館夢学園」理事長。「医療法人 盈進会」理事長。「日本経団連」理事。公益財団法人「School Aid Japan」代表理事。NPO法人「みんなの夢をかなえる会(申請中)」理事長。

東南アジアの小国、カンボジア。首都プノンペンから車に揺られて三時間、ポルサット州の荒野に惚然として「夢追う子どもたちの家」が姿をあらわした。

私は縁あってカンボジア、ネパールで小中学校を建設するボランティア活動を行っている。多くの方の賛同を得て、いま一四〇校を超えるまでになってきた。

そんななか、二〇〇八年に完成したのが「夢追う子どもたちの家」だ。孤児院を建設することは孤児たちの親になることと同じ。学校を作るのはわけが違う。彼らの人生を背負わなければならぬ。しかし、私は踏み切らざるを得なかった。一日中ゴミの山でゴミを漁る子どもの姿が私を突き動かしした。

あれから二年が過ぎた。今では七七人の子どもたちの声が響いている。

今年の秋、嬉しいことがあった。一八歳のスレイノイーが高校受験に合格したのだ。朝四時に起きて自習をしていた。一日の勉強時間は一〇時間を超えたと聞く。

彼女の夢は「夢追う子どもたちの家」で働き、カンボジアの子どもたちを助けること。

一〇万人の孤児がいるカンボジアで七七人という数は微々たるものだ。しかし、大海の一滴でもあった方がいい。小さな種は蒔けば必ず芽を出す。

そもそも、なぜこのような孤児が生まれてしまったのか。

一九七〇年代に起こった内戦に起因する。ポルポト政権下では数百万人の国民が死に追いやられたという。以来三〇年以上経っても、傷痕は消えない。

国の指導者が道を誤るとどうなるか。カンボジアに行く度に、私の心は震える。

一方、欧州の小国オランダで思わぬ出会いがあった。デニーおばあちゃん、九一歳。おばあちゃんは通常の年金だけで生活している。年金は月に一三万〜一四万円という。

おばあちゃんは、日本の基準で言うならば要介護二〜三であろうか。一〇万円

の介護保険がもらえる。ところがおばあちゃんは、介護保険はもらっていない。

聞いてみた。「なぜ、一〇万円をもらわないの?」。おばあちゃんは答えた。「年金の一三万円があれば十分。自分が介護保険をもらわなければ、国がちゃんと使ってくれる」。

私は言葉を失った。九一歳の老婦人は国を、政治を信じ切っているのだ。自分が介護保険をもらわなければ、もつと国が有効な使い方をしてくれる、と。

このような感覚が今の日本にあるだろうか。今の日本に欠けているのはこの「信」ではないかと思う。国民が政治家を信じる、政治家が国民を信じる。そのお互いの「信」があつてこそ、真の政治が成り立つ。まさに「信なくば、たたず」だ。

デニーおばあちゃんは帰途に就く私に言葉をプレゼントしてくれた。「人間だから政治家も間違ふことがある。でも、その時には、次に正しい政治家を選べばいいのよ」。



次号は、ソフトブレン (株) マネジメントアドバイザー 宋文洲氏にお願い致します。

※本コーナーは、弊会ホームページでもご覧いただけます。